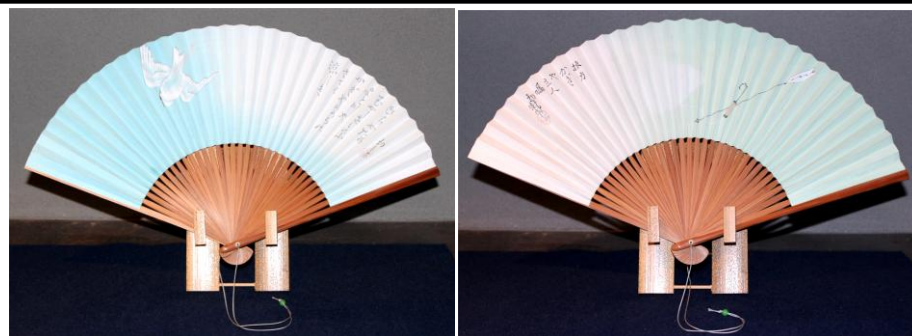
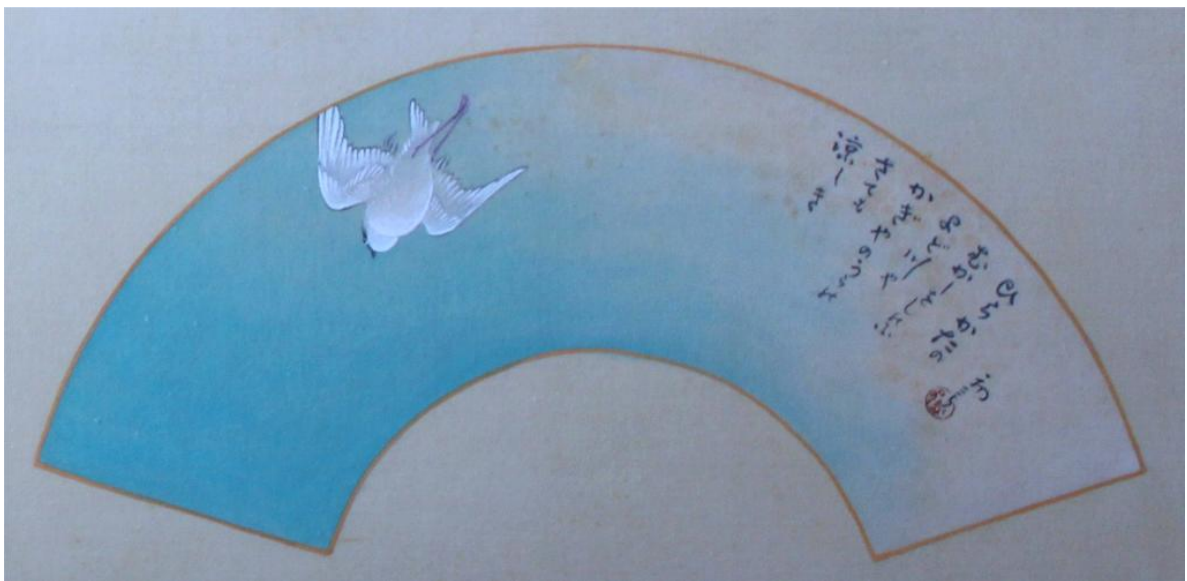
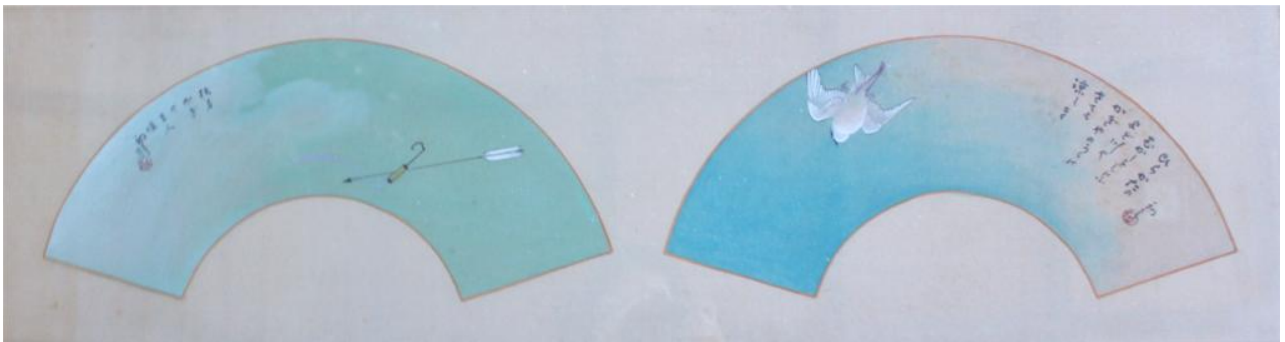


資料紹介 1

新収資料 吉田初三郎の「かぎや扇面画」

上「かぎや扇面画」(現 扁額装) 絹本彩色 111 cm×30 cm (額装前)

下「かぎや扇面画」部分拡大



かぎや扇子

扇子に仕立てられた扇面画。得意先に配られた。

本図は、大正時代から昭和時代前半にかけて活躍した、鳥瞰ちょうかんず図画家、吉田初三郎(1884～1955)の描いた扇面画である。鳥瞰図とは、鳥の目になって大地を見下ろす、俯瞰ふかん構図で描かれた絵地図のこと。昨年、古書店から購入した新収資料であるが、扇面に「枚方 かぎや主人 囑ためがき初三郎 謹作」の為書があり、もともと、初三郎から鍵屋主人に贈られた作品であったことがわかる。この扇面画は扇子に仕立てられ、暑気見舞いの挨拶に得意先に配られた。資料館には、鍵屋の蔵品であった、本図と同じ図の紙本扇面下絵と、仕立て済みの扇子が所蔵されている。

背景は、さわやかな水色に塗られており、白雲たちこめる夏の風情である。大空を羽ばたく鳥は、夏羽のユリカモメか。裏面には、鍵と矢を交差して描き、「かぎや」を示す洒落っ気である。鳥の図に添えられた和歌は、淀川を詠んでおり、現在では夏季の全国最高温度を出している猛暑の枚方であるが、涼感に満ちた品の良い作品に仕上がっている。

ひらかたの むかしをしのぶ よど川や かぎやのうらの さても涼しき

「かぎやのうら」とは、「鍵屋の浦」のこと。江戸時代末期から明治にかけて、鍵屋の裏手は淀川舟運の船着場となっており、鍵屋浦と呼ばれた。初三郎がこの扇面画を描いたのは、昭和 27 年(1952)。京阪神の運輸はすでに鉄道に移っており、鍵屋浦の賑わいは「昔をしのぶ……」状況であった。

初三郎と枚方の関わりは、大正時代にさかのぼる。大正元年(1912)、初三郎は枚方菊花園の室内背景画を手掛けた。京都に生まれた初三郎は、25 歳のときに洋画家・鹿子木孟郎かのこぎたけしろうに入門したが、ポスター・絵地図・装丁画などを手掛ける、商業美術に転向した。菊花園の背景画は、商業画家としてスタートを切って間もない頃の作品である。その後の初三郎は、多くの弟子を抱えた工房を構え、自ら「大正の広重」を名乗って、精力的に制作に取り組んだ。彼が企画した鳥瞰図は生涯で1000点を超え、戦前には、アジア大陸を視野に入れた鉄道観光ブームや、富国強兵の先鋒であった産業勃興の気風に乗じて話題を呼び、初三郎も一躍時の人となった。

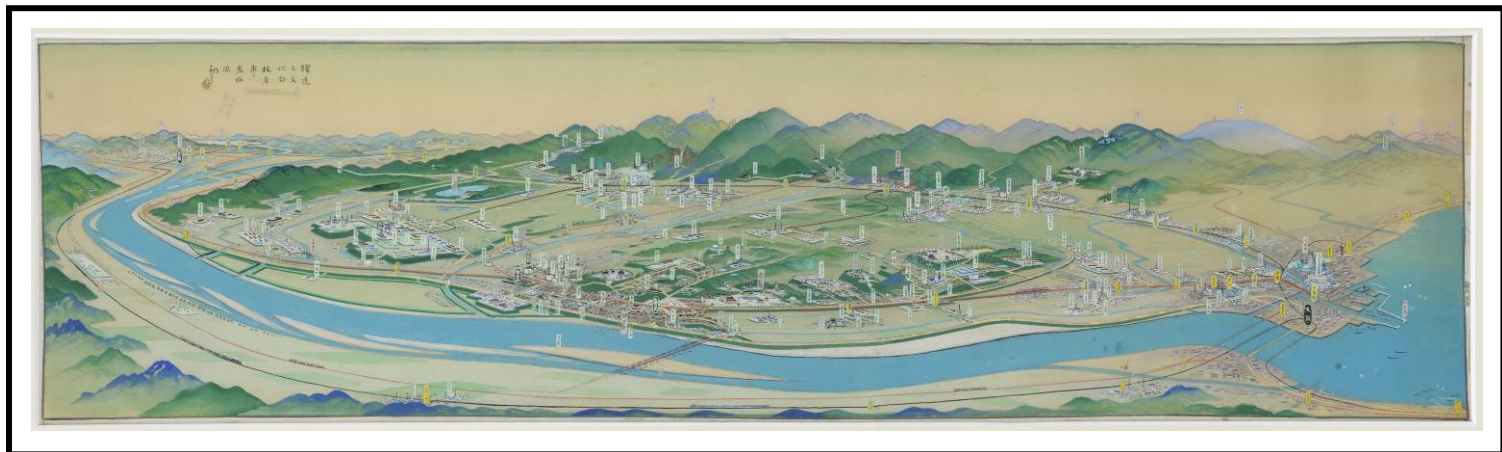
初三郎が仕事のうえで再び枚方に関わるのは、昭和 26 年(1951)のこと。枚方商工会議所の主催で刊行されることになった産業文化観光案内パンフレットに、初三郎の鳥瞰図が掲載されることになったのである(⇒資料紹介 2)。作図のための踏査に、初三郎は枚方を訪れた。

「かぎや扇面画」が描かれたのは、その翌年である。おそらく、鍵屋に複数回宿泊することがあり、主人に請われ、描いたものであろう。初三郎は、昭和 30 年(1955)に京都の自宅で 71 歳の生涯を終えており、晩年の作になる。戦前、時代の寵児ちようじとしてもてはやされた初三郎も、戦時中は防諜ぼうちようのための絵地図発行禁止の憂き目にあい、多くの弟子を戦死させるなどの苦難を味わった。奇しくも、

商業画家としての出発と終焉で、枚方に関わることになった初三郎。「かぎや扇面画」のおだやかな印象には、時代に翻弄されながらも、生涯を鳥瞰図製作に捧げた初三郎の心境が現れているのかもしれない。

資料紹介 2

吉田初三郎「枚方附近鳥瞰図」(原図)



昭和 26 年(1951)、サンフランシスコ講和条約の締結を記念し、パンフレット「産業文化観光案内 北河内の巻」が出版された。枚方市市制 5 年目、戦後の地域産業復興事業の一環として、発足後間もない枚方商工会議所の主催になったものである。このパンフレットの目玉として掲載されたのが、吉田初三郎の「枚方附近鳥瞰図」である。本館では、原図と下絵を所蔵している。

本図には、産業振興という目的に沿って、学校・役所などの公的機関、名所旧跡の観光施設、工場・企業など協賛事業所の位置がイラストと題箋によって、細かくマークされている。構図は、淀川対岸から、^{ひらかた}枚方・^{かたの}交野を中心とした京阪沿線の都市、^{もりぐち}守口・^{ねやがわ}寝屋川・^{しじょうなわて}四条畷を俯瞰するというものであるが、独特のデフォルメが加えられている。まずは、琵琶湖から大阪湾に達する淀川の流れを大きく湾曲させて描き、メルマークとなる山名・都市名を入れることで、京阪神地域全体のなかで対象地域が位置づけられている。大阪府の^{きしわだ}岸和田から、奈良県の^{おおみねさん}大峰山、京都府の^{あたごさん}愛宕山、滋賀県の^{ひえいざん}比叡山、兵庫県の神戸港と、実に2府3県が一図に描きこまれているのである。このような極端なデフォルメは初三郎鳥瞰図の特徴であり、測量図とは異なる、イラストマップの妙味を最大に活かしたものである。

しかし、一方で主題となる景観に関しては、現地踏査にもとづき細密に描かれており、本図にも、戦時中に利用された^{なかみや}中宮の軍事工場引込線や、宿場の賑わいを伝える、現在と異なる中心地など、今はなき景色がつぶさにみてとれ、大変興味深い。

展示によせて

旧枚方宿の古写真 —郡役所と淀川を望む

右上の写真は、旧枚方宿で宿場役人を務めていた旧家に残されていた古写真のうち一枚です。明治時代から大正時代の写真は、ガラス板に乳剤を塗布してフィルムの役割を持たせた、ガラス写真です。この写真は、現在はおちゃやごてんあと御茶屋御殿跡公園のある丘陵(万年寺山)から淀川方向を望んだものです。右下の写真は、現在、ほぼ同じアングルから撮影したもので、川向こう、摂津の山並の形が一致しています。現在の写真にみえる京阪電車の軌道はまだみえず、明治43年(1910)の京阪電車開通以前に撮影された写真であることがわかります。



上 明治時代の古写真
下 平成22年5月撮影

中央にみえる、立派な車止めのある建物は、北河内郡役所です。この場所には、江戸時代には建坪215坪半もある本陣(池尻善兵衛家)が軒を構えていましたが、明治初年に取り壊され、明治21年(1888)に跡地に枚方郡役所(後に北河内郡役所)が新築されました。昭和17年(1942)以降は北河内地方事務所、戦後は公民館として使用されましたが、昭和20年代後半に撤去されました。現在は、西半分が淀川左岸水防事務組合事務所と三矢会館、東半分が三矢公園(現在造成中)となっています。

また、二つの写真を比べると、淀川の川幅が大きく異なります。明治時代の淀川は大小の船舶が就航する大河でしたが、現在は川幅を狭め、高槻寄りを流れるように改修されています。郡役所あたりから、京街道は内陸に進み、河岸には水田が広がっていました。枚方大橋の開通以前、三矢の川岸から、高槻の大塚村までつないでいた渡し舟も、小さく写っています。

展示の案内

枚方宿鍵屋資料館では、7月2日(金)から8月5日(木)まで、「旧枚方宿の古写真展」を開催いたします。旧宿場役人の家に残されていた古写真を、現在の写真と比較しながら、約25点展示いたします。宿場町の名残をとどめる町並みや、帆掛け船の浮かぶ淀川。よき時代の枚方にタイムスリップしてください。